

東京バッハ合唱団 月報

[第 656 号] 2017 年 2 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 656

February 2017

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

《ロ短調ミサ曲》の年の初めに 平和を われらに！ *Dona nobis pacem!*

荻窪教会クリスマス演奏会

定期演奏会を終えた 2 週間後の 12 月 17 日 (土)、東京バッハ合唱団は、普段の練習会場の荻窪教会をお借りして、教会と共催のクリスマス・コンサートを開きました (下欄に終了報告)。

1 曲目は、バス団員・松尾茂春氏の作詞作曲による「キラキラ星変奏曲」。いずれは全 18 曲の大変奏曲になる予定の、初めの降誕物語部分の数曲を、自らの指揮で。2 曲目は、定演でのバリトン山本悠尋氏好演の余韻冷めやらぬカンタータ 82 番を、男声団員全員の斉唱で。3 曲目は、1 年後に本番を迎える《ロ短調ミサ曲》から、クリスマスのテーマを歌った楽曲を集めて。



▲荻窪教会クリスマス演奏会 (12/17. 写真提供・松尾茂春氏)

定演から間がなかった中で、団員一同よく仕上げられました。器楽合奏の支えがあったればこそこの達成でした。オーボエの土屋さん、オルガンの石川さん、弦の中川さんと木島さん、ありがとうございます。

<ご来場者アンケート回答>

アンケートへのご回答をお寄せくださいました皆さま、ありがとうございます。

①演奏全般について ②日本語演奏について ③本日の運営全般、会場について等、何でも ④何回目 (初めて、2 回目、それ以上)、媒体など

[1] ①平和をわれらに！まさにその通りです。来年は聞きにいきたい、杉並公会堂で。②私のように日本語しか分からない人間にとって、最高である。荻窪栄光教会の中田羽後先生が日本語にしたメサイアを毎年歌っていたが、歌うメンバーにとっては、バッハ・ヘンデルなど、その内容が魂にストレートにひびき、また聴いている人もそうである。ドイツ語もラテン語も

わからない私にとっては、あらゆる音楽は日本語で歌いたい、歌ってほしいと思う。《ロ短調ミサ曲》は実に素晴らしい。他の合唱団で歌ったが、完全には歌えなかった。《ロ短調》を日本語にくださったことは、実に大きなことです。大村先生に感謝します。③Sop が少ないようですが、他の合唱団から引っこ抜いてきてほしい、遠慮なく。牧師さんが一緒に歌っているのは実にうれしいことです。小海牧師、死ぬまで、ぜっ

たいに続けて下さい。私はもう聞くことしかできない。90 歳近くまで歌っていた団員もいるが、私は 1 月には 85 歳、「聖しこの夜」だったら歌えるが……。④3 回目かも。

[2] ①すばらしかった。②わかりやすかった。④初めて。ビラをみて。

[3] ①真摯な練習

がしのべれます。②日本の多くの方に理解していただけることを感謝いたします。③素朴でよい。④それ以上。荻窪教会、定期公演会場。

<終了報告>

荻窪教会クリスマス演奏会

[日時/会場] 12 月 17 日 (土) 14 時開演、荻窪教会

[曲目/演奏者]

●キラキラ星変奏曲《福音版》—変奏で綴るイエスの足跡—より (松尾茂春・詞/曲)

指揮: 松尾茂春、ピアノ伴奏: 大村恵美子/風岡和子

●カンタータ第 82 番《われ 足れり》

●《ロ短調ミサ曲》のなかのクリスマス音楽

〈グローリア〉〈地に平和〉〈み神に謝しまつらん〉〈肉をとりて〉〈主は甦りたもう〉〈平和をわれらに〉

オーボエ: 土屋愛菜、ヴァイオリン: 中川典子、チェロ: 木島洋一郎、オルガン: 石川優歌、斉唱と合唱: 東京バッハ合唱団、指揮/訳詞: 大村恵美子

[4] ①素晴らしかった。②日本語で歌われることによって、歌われる音楽の意味が解り、美しいバッハの旋律とあいまって、音楽が生きたものとして心に入ってきた。③小ぢんまりした会場で、演奏者との距離が近く、楽しかった。④それ以上。

[5] ②ルターがドイツ語でコラールを作ったことにあやかっているのですよね。④それ以上。前回での予告だったと思う。

[6] ①心のコもった演奏でとてもよかった。テンポも気持ちよく聞けました。②音大などで日本歌曲がよく歌われるようになってきました。日本語での演奏はとても分かりやすいので続けていただきたい。上記のようなことが長い目で力になると思います。④多数。

[7] ①素晴らしかったです。②いいですねエー！ ④それ以上。

[8] ①クリスマスにふさわしい選曲でした。松尾さんの「キラキラ星変奏曲」良かったです。ところどころ、バッハの香りがしました。「ロ短調ミサ曲」も大いに期待してやってきました。②日本語だと意味がよく分かります。反面、バッハ音楽はドイツ語、ラテン語を意識して作られたものですから、日本語が無理に音符に当てられることもあります。一長一短です。④それ以上。合唱団に知己の方がいるから。

[9] ③（教会の）制服でおやりになったら。④初めて。



第 114 回定期演奏会を聴いて

(12月3日、府中の森芸術劇場ウィーンホール)

嶋田 秀雄 (団員松尾氏知人)

全編皆楽しく、心豊かにされました。特に妻は、第1部のコラール合唱から、心魅かれたということです。私は、次第に引き込まれ、第2部のカンタータ第82番《われ足れり》を聞きながら、聖歌の「我は、主に在りて楽し、御前に歩みて足れり」の歌詞が、心に繰り返され、嬉しかったです。また、数日前に通読したルカの福音書2章のシメオンの記事に特別に目を留め、みことばを書き留め、祈ったものですから、そのシメオンの心が、伝わってきて、まるで、主ご自身が、私に向かって語りかけているようでした。

私にとって圧巻だったのは、第2部のカンタータ140番《目ざめよと呼ばわる 物見の声 高し》の1)の合唱、7)コラールです。圧倒されました。私などは、感激の余り、何度も涙を抑えることができませんでした。「イエス、神の子にホザナ」神様への讃美は、私たちの心を豊かにし、喜びに溢れさせて下さるのですね。ありがとうございます！ 本当に有難う！！

加えて、第1部の「アンナ・マクダレーナ・バッハの

音楽帳」IIでは、今までの印象とは、全く違うバッハの生活の別の側面が覗けたり、若いころの「ワクワクするような」心が、あの「楽聖」にもあったのかと、あらためて楽しく聴かせていただきました。

もうひとつ、ソリストの皆さんの声が、甘く、優しく、清澄で、特にテノール・バスの方たちは、素晴らしいの一言です。ああ、それにもうひとつ。毎回、妻も私も共に感謝することがあります。指揮者、大村恵美子さんの翻訳です。率直で、心に染み入るようで、私たちは、神様への信仰をリフレッシュさせていただきましたことも、つけ加えさせていただきます。

§ § §

花井 鉄弥 (後援会員)

過日はすばらしいカンタータ演奏をお聴かせいただき真にありがとうございました。久しく演奏会から遠のいておまして、座椅子の痛みが気がかりでしたが、お蔭様にて、久々のバッハの合唱、アリア、コラールに心奪われ、殆ど痛み疲れを感じずに過ごせましたのは、ありがたいことでした。

演奏、最初の暖いコラールの響きに身体が包まれた時、久しぶりにバッハのふところに帰ったような安らぎを感じました。ああ、バッハの世界だなあと、BWV 140の終曲まで、堪能しました。最後に先生の指揮で皆様と共に歌うことの出来たコラールは、何にもまして感動の極みでありました。

今日は何という恵まれた一日であったろうと、感謝と満ち足りた思いで一杯でありました。

どうか先生、ご自愛下さいまして、ご主人様共々、日々ご健勝に過ごされますようお祈り申し上げます。

§ § §

三谷 啓文 (反戦平和運動事務局)

親しみと優しさ溢れる、素晴らしいひとときでした。カンタータ14番、第5曲コラールには鳥肌がたつほど、演奏者のみなさんの思いがひとつに溶け合った瞬間でした。「音楽帳」は、恥ずかしながら初めて聞きましたが、愛らしい音の空間につつまれました。25曲〈かたえに 主いませば〉の恋心を誘うソプラノ、39曲コラール〈わが主 み神〉も気高い愛情に満ちて素敵です。カンタータ82番、140番と、オーボエの音色で安堵感にひたり、みなさまのとても誠実な唱和にも心洗われました。

「危機」のなかでこそ、この現実を乗り越えた「平安」を、真実の世界を忘れてはいけない。決してあきらめてはいけない……。バッハの音楽に託された大村恵美子先生のお心を感じたひとときでした。

どうかこれからも、お元気で活躍ください。ありがとうございます。



「日常的に」カンタータに触れる ということ

小海 基 (団員)

以前カンボジアにワークキャンプに行った際に、えらく驚かされた経験がある。私たちのメンバーの中には若い「僧侶の卵」がいて、一緒に訪ねたアンコールワットの遺跡群の中で、日本から持参した袈裟に着替え、数珠を持ち、朗々と読経をあげ始めたのだ。何ということであろう。たちまちにしてあのアンコールワットの遺跡群が、もはや単なる盗掘の跡の痛々しい「遺跡」でも、過去の栄光を寂しげに語る「世界遺産」でもなく、まして熱帯樹林の蔓に絡みつかれ、うち捨てられた「観光名物」でも、かつてのインドシナ戦争のゲリラの立てこもった銃痕だらけの砦でもなく、堂々とした現役の「仏教伽藍」と化して輝き出していったのである。何という劇変であろう。そうだ！ ここは本来そういう場所だったのだ！ いつのまにか線香の煙が漂ってくる。こんなにも供花が手向けられていたのだと気づかされる。どこからともなく信心深いカンボジアの仏教徒たちが集まってくる。この人たちはついさっきまで我々観光客に執拗に施しを求めていた人たちではなかったか？ 敬虔で熱く目を輝かせながら祈りに加わっていく群れが広がる……。

理想のバッハのカンタータの上演先というのはまさにこういう礼拝場所なのだ、とその時以来、私の頭の奥底で回り続けている強烈な光景である。

今回の114回定期演奏会の直前に、大村恵美子先生から渡された資料のひとつに目を通しながら、私はその時のことを思い起こさずにはおれなかった。それは全く真逆の驚きであったからである。その資料というのは、小学館「バッハ全集」第11巻チェンバロ曲①に収められた「月報3号」(1996年7月)の巻頭の「編集長インタビュー」で、当時の聖トーマス教会カントルであったゲオルク・クリストフ・ビラー氏に対するものであった。その職はかつてバッハも担ったものである。この高額な小学館版の「バッハ全集」を、私は宗教曲の収められた巻しか持っていないため、まさか他の巻にこんな重要な証言が載っていたことを初めて知らされたのであった。少し引用してみよう。

「第二次大戦中、ギュンター・ラミンさんがカントルのときカンタータの上演を土曜日にかえました。当時は、市内のニコライ教会でもカンタータの演奏を行っていましたが、戦争が激しくなると、両方の教会で交互に演奏するようになり、そしてついにはトーマス教会だけがカンタータを演奏することになってしまいました。戦後、事態が落ちついてからも、人もたくさん来るし、土曜日の方がよいのではないかということまで現在に至っています」…「もう一つの理由を付け加

*) 問いかけ：

“あなたは、どんな共感を、東京バッハ合唱団に寄せていらっしゃるでしょうか？”

上のような問いを、団員、後援会員の方々に発してみました。なるべく抽象的でないお答えをいただけるようにと、次の2つの文章に対する感想のような形で、という思いで、

①独文学者・高橋英夫氏のエッセー「バッハ・エスキス」(小学館『バッハ全集』第11巻 pp118-126)

②トーマス教会カントル・ビラー氏への大原哲夫編集長によるインタビュー(同巻付録の月報第3号)のコピーを添えてお聞きしました。

昨年12月号掲載のお三方について、お応えをいただきましたので、ご紹介します。(大村恵美子)

えれば、日曜日のミサ〔礼拝〕は、現代の言葉、今話されている言葉で行われています。ところが、それと昔風の言葉で上演されるカンタータとが全くそぐわないのです。だったら、ミサ〔礼拝〕とカンタータを日曜日と土曜日に分けてしまおうということになりました」。

思い返せば確かに、私が別の合唱団の一員として聖トーマス教会の聖歌隊席で《ロ短調ミサ曲》を歌った時は2013年の夏の日曜日の夕方であったが、しかし残念ながら、さすがに礼拝の中でというわけにはいかなかった(《ロ短調ミサ曲》は、プロテスタントであろうとカトリックであろうと、現在の礼拝の長さにとっても収まり切れないこともあったろうが……)。

このインタビューはショッキングである。バッハの死後からメンデルスゾーンによって「バッハ復興」がなされるまでの「バッハ忘却の時代」というならともかく、旧バッハ・新バッハの2度の立派な全集が出版され、紛れもない「代表作」である教会カンタータでは、ひっきりなしにCD全曲盤が何組も出されるような現代にあっても、その演奏の多くは教会の礼拝堂ではなく、ホールか録音スタジオであり、本場ライブツィヒの聖トーマス教会においてさえもそうした位置づけに墮していたというのである。

日本のようにそもそもキリスト教がマイノリティーで、礼拝堂も狭く、オーケストラと合唱で一杯になってしまって聴衆の入る余地が無いという環境ならまだ分かるし、諦めもつくというものである。しかしドイツは違うだろう。ライブツィヒがそれで良いとは言えまい。バッハの時代のままに礼拝堂が残されており、市内にはゲヴァントハウスをはじめとする優れたオーケストラも、古楽グループもいくつもあつち、耳の肥えた聴衆も溢れているというのにである。

さらにショッキングなインタビューは続く。

「〔ビラー氏がカントルになったからこそ、新しい試みとして〕ええ、私が実践しようと思っているのは、バッハのすべてのカンタータを上演しようということ

です。私の前任者たちの時代に演奏されたカンタータの曲目を調べてみますと、1 ダース、あるいはそれを少し超えるぐらいの数のカンタータが繰り返し演奏されてきただけでした。

ちょっと待ってよ、ビラーさん！と、思わず声をあげたくなってしまった。「1 ダース、あるいはそれを少し超えるくらい」ですって？ それなら東京バッハ合唱団「結成 50 周年」を機に入団した私の方が余程、数が上回っているくらいじゃないですか！ 本場ライブツィヒの聖トーマス教会がそれで本当に良いのですか？ かつて旧東ドイツのベルリンを訪ねた時に、ベルリンには、死ぬまで毎朝、著名なコラル作家のパウル・ゲルハルト牧師のコラルだけを歌って礼拝を守り続けてくれる老人ホームがあるというのを知って、自分だったら、ライブツィヒで毎週バッハのカンタータを聞きながら最晩年を過ごしたい、とさえ思った私の気持ちはどうなってしまうのだろうか？ 私がこれまで愛聴してきたギンター・ラミン盤、ハンス・ヨアヒム・ロッチュ盤、ペーター・シュライアー盤のトマナコア（聖トーマス教会聖歌隊）やクロイツコア（ドレスデン聖十字架合唱団）盤のカンタータは、「日常」的にカンタータを歌っている人たちの演奏、とばかりに想像を膨らませていたのに……。それこそが、西側のアーノンクール／レオンハルト盤、リリング盤、ガーディナー盤、トン・コープマン盤、鈴木雅明盤とは一味も二味も違くと、膨らませていたのに……。

ビラー氏が最近体調を崩してカントルを退いたというニュースが流れてきたが、このインタビューがなされた 96 年の時点で、99 年までには終える予定、と語っていた聖トーマス教会での「教会カンタータの全曲演奏」は、はたして実現できたのであろうか？

東京バッハ合唱団創設 50 周年の時に、私が何よりこの合唱団に入団したいと思ったのは、日本には他にもバッハを演奏する合唱団がたくさんあるかもしれないけれども、この合唱団は少なくとも日常にカンタータを歌いこんでいる中でバッハの大曲も歌うという姿勢を持っているグループだからであった。あの多様なカンタータをほとんど何も知らないで《マタイ受難曲》、《ヨハネ受難曲》、《クリスマス・オラトリオ》、《ロ短調ミサ曲》だけを歌って、バッハを「極めた」ような思いになりたくなかったからである。しかもこのグループは「日本語上演」をするからこそ、バッハが音符に乗せたひとつの言葉の「衝撃」を、歌い手だけでなく聴衆と共有する「瞬間」を味わうことができる。

私は、この東京バッハ合唱団がホールで定期演奏するだけでなく、荻窪教会に限らずいくつもの教会の礼拝堂でカンタータを演奏していることに、「日常」的にカンタータに触れるという意味があると思っている。1980 年代に来日したヘルムート・リリング氏が明治学院大学の礼拝堂でバッハ時代の音楽礼拝を再現し、NHK で放映されたことがあったが、あれはいかにも非

「日常的」で、そこに集う人たちもあのカンボジアで出会った、見る見るうちに敬虔な仏教徒に変化していった人たちとは違って、いかにもバッハ「おたく」風な人々で、がっかりした覚えがある。もっと「日常的」に、この街の周りの人々がバッハの響きに誘われて、そしてそこで歌われている「言葉」にショックを受け、巻き込まれていくということが生じるとよいなと思っている。案外、本場ライブツィヒよりも、荻窪、目白、世田谷あたりの方が、そうした「日常」が再現されるのでは、と期待するのは牧師である私の妄想なのだろうか？（こかい・もとい、荻窪教会牧師）

お・た・よ・り

島 正孝（後援会員、長野県富士見町）

夕暮れ早く、東の空に冬の星々が昇ってきます。八ヶ岳・編笠山の右肩のすぐ上です。

このたびは、定期演奏会の CD をお贈りいただき、ありがとうございます。折々に心を鎮めて愛聴させて頂きます。田舎の片隅で、そっと息をしているような情けない人間ですが、生活の内に常に音楽がありますのは、天上からのお恵みかしらと、感謝しております。最近、F. シューベルトの最後のピアノ・ソナタ第 21 番変ロ長調 D. 960 を何人かのピアニストの演奏で聴き比べをしております。この世の悲哀を味わい尽くした、その向うに仄かな希望の明るみが見えてまいります。

年齢を重ねるのは、悲しみではなく、一種の喜びであると思います。40 歳、50 歳では味わえなかった感動が、本当に主観的、一人よがりでしょうが、70 歳を過ぎてしみじみと音楽に向き合えるようになった気がいたしております。もう少し永く生きて、J. S. バッハ作曲のマタイ受難曲全曲をスコア片手に聴き入りたいと希っております。

冬の星々の輝きを、この貧しい便りと一緒にお届けいたします。

この便りを私の分身として旅立たせます。草々

2017 年の活動予定

- 7 月 1 日（土）…創立 55 周年記念日（詳細計画中）
- 8 月 3 - 6 日（木 - 日）…野尻湖合宿&コンサート
（“ハーモニー”の醸成と《ロ短調ミサ曲》の強化が目的です。自由参加ですが、ぜひ全日程のご参加を。詳細計画中）
 - ・8/4（金）…夕方～、野尻湖公民館
“信濃町の皆さんとのワークショップ [第 2 回]”
 - ・8/5（土）…午後 4 時、野尻湖国際村・神山教会
“湖畔コンサート [第 42 回]”
- 11 月 23 日（木・勤労感謝の日）
…第 115 回定期演奏会《ロ短調ミサ曲》
午後 2 時開演、杉並公会堂